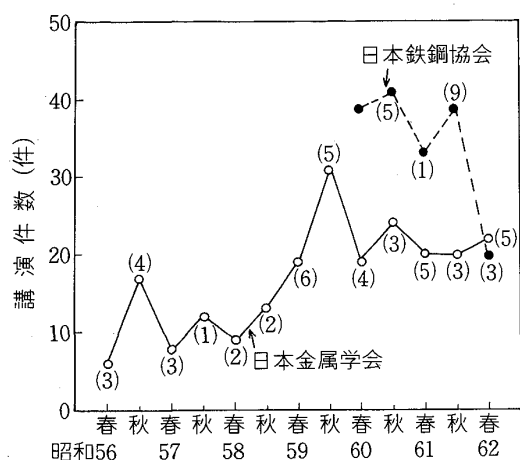


統 計

チタン関連研究の講演動向

本協会は、昭和 60 年 4 月の講演大会より萌芽・境界技術部門を設けて、その部門の一つのセッションとして「チタン」を取り上げている。それ以来、すでに 5 回の講演大会が開催されたので、講演件数と講演内容構成の推移を示して、その活動状況を紹介することにしたい。

図 1 は、兄弟学会でありまたチタン研究の先輩学会でもある金属学会、及び本協会での講演件数の推移を示した。金属学会では、現在の講演件数は 5 年前に比べると倍増している。しかも、本協会での講演が開始された後も、講演件数は変わっていない。したがって、



() 内の数は、チタンセッション外での講演件数

図 1 チタン関連講演件数の推移

本協会での講演活動の取り組みによりわが国のチタン材料研究は大きな広がりを示し、また講演数から判断しても本協会の活動は極めて活発であるといえるであろう。

図 2 は、本協会講演内容の構成比を示した。本協会の講演は、プロセス技術による材質制御、すなわち材料開発に直接関連した研究が多いのが特徴であり、その講演が全体の半分強を占め、組織や耐食性、破壊特性などの解析評価研究が $\frac{1}{3}$ を占めている。生産技術としてのプロセス研究や利用技術に関する講演はまだ少ないのが現状である。

(金属材料技術研究所筑波支所 河部義邦)

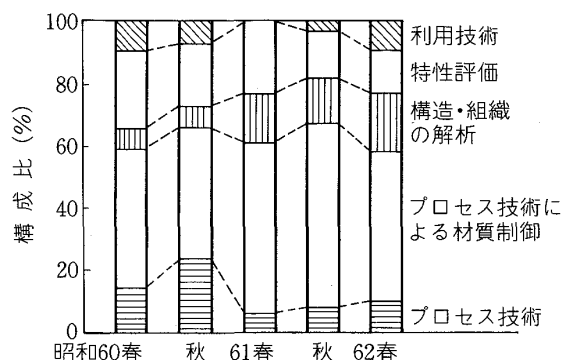


図 2 本協会におけるチタン関連講演の内容

編集後記

秋の講演大会プログラム編成委員会が先日終わり一息ついている。今回も 801 件の申込みがあつた。そのうちわけは企業からの申込みが 658 件、大学関係 107 件、研究機関 30 件、外国 (NICS) から 6 件、まづまづの盛況で“メデタシ、メデタシ”といったところである。このような盛況さの秘密は何なのか、またいつまでも続くのかとふと思つた。

まず盛況さの原因であるが、企業がノウハウ的なことも互いに積極的の発表する気風があること、そして企業間に技術差すなわち論文差がなく、講演大会が活発に討論ができる場となつている、ことによると思う。

ところでこの盛況さが続くかとなると少し悲観的になつてしまう。少し悪い予感がするようになった理由を次に述べたい。

その 1. この 1 年間 IISI が主催する Special study team に参加する機会を得た。HSLA に関する報告書をまとめたが、ヨーロッパのメンバーはちよつとしたことをもノウハウだノウハウだと公表したがらない。日本人が異常に発表したがる人種かと思うほどになつ

た。先進化すると日本人もこのようになるのかもしれない？

その 2. 鉄分野は何兆円の売上げをもつ巨大分野であるが、新材料分野の多くは、せいぜい何十〜何百億の規模である。鉄では各社がともに研鑽し、ともに利益を受けることができた。しかし規模の小さい分野では発表することが他社に多くのヒントを与え、その結果、減益につながらないか。こうなると発表も減るのでは？

その 3. NICS からの講演申込みが 6 件あり、そのうち 1 件を査読した。我々が現在非常に問題にしているところの分野への参加であるが、その内容は理論曲線だけで実測値がなく、またその理論値の仮定もあいまいであつた。外国人の発表を歓迎するが、あまりレベルの低い内容で仲間入りして先端技術を持つて行かれることになると警戒心が働き、出さなくなるのではなかろうか？

これらの予感がすべて思い過ごしであつて欲しい。

(C. S.)